

⑤ 3362^R-1/2

地名 1438' (馬城) ③ 336/1
 ③ 3374 山つ 1314' せん
 この前山は ③ 3360' 1/2 (零) 126/1

562年香推
563年宇經
(南) 3359° 方

香推翠 562年 (庚) 33.59
字佐善 563年 味 "
紀上 268
(庚) 3371 年 同文

(A) 3373^P 同分
 紀上269^P
 (B) 3338^P 4-2-11
 3,366^P

宇佐津彦
3349P 6斤

とある。

3405⁺ - 1/3

馬城峯山頂の口内宮への遷宮

天照大神 および三女神は、国東半島基節の

馬城峯(大元山)の山頂に造ら

水
友
旅
宮
内
宮
御遷座す
水
こと
こと
な
た

のてあろう。
すえろ
かしのみ
た
あ3363
まっころ
ちあ

欽明二十三年(五元二)末頃香榊宮を焼つて、

年伊邪国(宇佐国)に到着した天照大神

御鎮座の儀式は、
垂仁天皇に相当する
欽明天皇の

二十五年(五十六)二月八日にとり行なわせたのかも知れない

重仁紀 二十五年二月八日条に
こう記さ小

てい
る
祭
あへのおみとまつおやたけぬなかわり
素組式亭川柳
わにのおみとまつおやひこ
月亭素目彦

陽傳臣の這利武濱川る・利王臣の涼石彦
 なくふく　なかとみのむうじとほつあやおほかーま　もののべのむうじとほつあやとた

國畫・田畠通の遠村大磨山・物音通の近石
 ちぬ おぼとめのむらじとまつあやたけひ りつとり OK まへつききたち みことのり
 一畝の草の葉のむらじとまつあやたけひ りつとり OK まへつききたち みことのり

千	のたま
柿	は
・	く
大	に
佐	め
連	ハ
の	毛
近	皇
所	印
立	司
日	成
五	ハ
の	秀
力	五
夫	十
に	負
言	直
一	天
一	星

[illegible][illegible]

月二
又
く
達
り
た
ま
し
る
中
路
)

今失りて、申氏を祭祀するにと、
いまあまつかうたつかみ。リはひまつ

念
有
と
昇
心
や
口
と
の
左
其
了、
一

前
中
氏
の
旁
系
筋
宇
左
津
彦
の
す
兄
と
同

急遽

セ科第3361 中世中世中 趣旨1063
国をあげて 3344 4号

3,367P

12下159P 用明2年
3348-1/2

われる大鹿嶋か、五大夫の一人であったとは
考えにくい。

●あるいは、本来、

阿倍臣・和珥臣・婚系の中臣連・物部連・大伴連らの遠祖である曰五大夫

よび（中臣連の傍系筋に当る）大鹿嶋

と記されていたのではなかろうか。

●ところがその後の用明二年（五八七）、中臣

氏の嫡系は仏教受容に反対して滅び

常磐（鎌足の曾祖父）が傍系から入って中臣

連姓を継いだ、と考えられる。（既述）

●日本書紀の編纂者達は、そうした

てを熟知していたにもかかわらず、

へまぎらわしばかりであり、くどくど

明する必要性もないので、あえて、

うっかり誤った

ということになったのかも知れない。

●ともあれ、国中もあげての太々的な晴水やか

な遷宮の儀式が、奉行なれ

よび三女神は、月出たくも伊邪国（宇佐国）

3313-1/2 2057

均等

同文
 ③3405-7/2
 ③3059-3/11
 ③3405P-1/3 伊勢人 3.368P
 ③3405P-2/3 11
 ③3405P-3/11
 ③3059-4/11
 ③3059P-2/11
 大神宮諸神奉祀り
 我々神

馬城山峯 (大元山) 山頂の 内宮に
 宇佐国に鎮まりたもうた
 うう、と推察さしめる。

かし、天照大神は、
 寂しく、孤独
 であつた。

ここに天照大神は、
 食津神を
 丹波国と謝郡に地
 理的に相当する所、東松浦半島東部の湊所あ

たりに坐しておる水た神
 梯儂様は三狐神
 と託宣さしたことはなかろうか

また天照大神は
 我が祭に仕え奉るとき
 先づ豊受神宮を

祭り奉るべし
 と重ねて託宣さしたように想像さしめる。

そこで、次の年の七月七日
 へ天上の天照大神の宮近く鎮座して
 おろした豊受神(梯儂)を、
 宇佐国馬

よそえ 2292° たらた 1675°
寄添う

3,369°

4/5 17 4/4

と想
到さ
小る。

米

① 日内宮ないぐう (天照大神あまてらすおほみかみを祭まつる神宮かみのみや)
② 日外宮がくう (豊受大神とゆりのおほみかみを祭まつる神宮かみのみや)
の二つの宮は、宇佐国馬城峯うさのくにまきぎのみねの山頂さんちゆうに寄り添そうように並ならび立たち、これより以降いこう、長ながらく、人々たがたに厚あつく敬やまゆれ続つづけていった、

城峯ぎのみねの日内宮ないぐうのすぐ近ちかくに迎むかえ奉まつったと考かんえてみたしい。(第五十五章へ豊受大神とゆりのおほみかみの項参照)

近傍きんぼうに

ちか

倭姫命の成立

大倭国（九洲）の都に長年祭られてお

れた天照大神が東国の伊弉国（宇佐

国）へ御遷座されることになった突然

という驚くべき知らせは、直ちに日辺日

本国（近畿）の都にも伝えられた。

東の都の人々は、とまどいを覚えなから、

こう噂あつた。天上国では、伊弉国（宇佐国）に太廟を

設けるその大神宮に天照大神を御案内申し

上げることになったという。我が日辺日本国

のみ、天照大神を都近くの笠縫邑に留め祭

っていてよいものであろうか。

うむ。何ともにかには信じ難い破天荒

なことも思えるが、しかし、もうもや水

が事実であるなら、この日辺国に於ても同

様、東国の伊勢国に太廟を設けるその大

神宮へ天照大神（八咫鏡）をお遷しせねばなる

まい。

その後引きもきらず天照大神降臨の知ら

せが日辺日本国へ伝えられてきた。

おと522 大神 3366P~3369P 3.370P 大朝 小林 272P 天 上の紀 118P ちん20 鎮 43P 362.7.25 3372P 3372P せんき 大カ7 804P 遷 神侍を遷すこと

H30.8.29(木)~8.31(4日) 紀上

下

重仁の妹倭姫命 267

③ 3219

④ 3090

⑤ 3368 3/3 倭姫命 ⑥ 3378
P 紀上 269 34
次頁 15行 562.7.26
⑦ 3378 龍原若狭 領明 26年 10月 6日

⑧ 238 紀上 269

⑨ 3364 3374
紀上 268

倭姫命は末子であらうか？
領明天皇の妹か？

↓先述のとおり

馬城峯山頂に内宮の建立が成った時
天照大神および三女神の御鎮座の儀式が
仁二十五年に相当する 欽明二十五年(五六
四)二月八日 盛大に挙行された
と推察される。第六十五章 大元山山頂の
内宮の遷宮の項において既述
さて、早くもその一ヶ月後、(重仁二十五
年に相当する) 欽明二十五年(五六四)三
月十日
大和国の笠縫色の天照大神の八咫鏡は、
豊相入姫命から贈られ、倭姫命に託された
と考えてみたい。(重仁二十五年三月十日条参照)
なお、倭姫命は 重仁天皇に相当する
欽明天皇の皇女であつたらうか。
天照大神(八咫鏡)を奉戴する倭姫命は、
ゆすかな着座を引きつただけで慌しく
笠縫色を後にして東へ向か
に想察される。

米

後3374-1/2 紀上269P
1857

「みち」坂
3,372P

鎮祭

「祭られておいてになった」
3370P

祭祀 857P

逆2行43元1467P

この記事により、概略の順路は分かるが、

とある。重仁紀二十五年三月十日条参照

東のかた美濃を廻りて、伊勢國に到る。伊勢國に入りて、
姫命、大神を鎮め坐させむ處を求めて、菟田

三月十日 天照大神を豊船入姫命より

は、本書紀に「ごく簡単」に、こう記されてゐる。

日本書紀（重仁紀二十五年三月十日条）に

到達されるまでの道順について述べてみよう。

御鎮座の場所を求め、天下を廻り、伊勢國に

大神の宮日内宮の地に相当する「麗々しい

御案内され、天照大神八咫鏡が、倭姫命に

おぼたれた。天照大神八咫鏡が、倭姫命に

大和國の笠峰邑に祭ら

倭姫命の日周行天下に

「やまとひめのみこと」

3358P

「何」

240P上 2行

⑤ 3375⁵-2/4 56 ⑥ 5266¹-1/3 74
大村神社

①-333 万安騎の野 東の野に東の豆つみえ
 大カワ 2353° 阿 紀上591° 29
 紀上591° 29 3374-3/8 10 儀才帖 2P
 3374-3/8 3.373-2/8 3373 大元山に 御鎮座 3364 3365 3365-1/3 15 7 賄
 3364 3371 3364 3365 3365-1/3 15 7 賄

明瞭 ないが
 この五人（いや、実は五大夫と大鹿嶋命の
 六人であらう）は
 欽明二十五年（五六四）二月八日に、
 大神および三女神を、伊邪国（宇佐国）大
 元山山頂の祭宮（内宮）に御座内して、晴水
 やかな御鎮祭（御鎮座）の儀式をとり行ない、
 その約一ヶ月後の三月十日ころ、五大夫は目連日本国
 （近畿）の美和乃御諸宮（桜井市三輪）へ駆け
 つけ、天照大神、八咫鏡を奉戴してあらわ
 した倭姫命につぎ従い、日周行天下の旅
 路についで、東国の伊勢国へ向かったのである
 と想像される。（第47表、第423・424図参照）
 さて、美和乃御諸宮を発した倭姫命の一行
 は、東へ東へ歩を進め、日宇太乃阿貴宮に
 （宇陀郡大字陀町阿貴）を経て、日佐々波多
 宮（宇陀郡榛原町に筱幡神社がある）へと
 行った。（日本書紀）（日本書紀）（日本書紀）
 なお本来なら、（阿蘇の中岳に相当する）

明瞭でないが、
 3372 1839

五大夫は日連日本国

3374 1839
 3365 1/3 15
 3372 15 3月10日とある

3364-3/3 10所

3373-1/2 6所

3373-3/3

大カマ 2589
そのみ

元使 大カマ 2498
日馬 大カマ 2239

皇大神宮儀式帳 2P

4277

原文 (ほんの参考近に則布)

御杖代一齋奉支。美和乃御諸原爾造一齋宮。出奉天齋始奉支。爾時倭姫内親王。太神乎頂奉且。願給國求奉時爾。從美和乃御諸宮發且。令出坐支。爾時御送驛使。阿倍武淳川別命。和珥彦國葺命。中臣大鹿嶋命。物部十千根命。大伴武日命。合五柱命等爲使且令入坐支。

活目天皇御世爾。倭姫内親王遠爲ニ

とある
爲ニシ使ト且
十千根命
別命
坐
奉
倭姫内親王
造ニ
王遠
爲ニ
御杖
代
齋
奉
美和乃
御諸宮
爾時
御送驛使
阿倍武淳川
中臣大鹿嶋命
物部
合五柱命等
大伴武日命
出坐支
願給國求奉時爾
從美和乃御諸宮發且
令出坐支

式帳
ここのところ因みに述べる
皇大神宮儀
次のように記されている
活目天皇(重仁天皇)御世爾、倭姫内親

3375-1/2

参考近に述べる

478

大カマ 1444

大カマ 1444

③ 3365^P-1/3 15T

コクヨ、ケ-20 20×20

日本社 419 164 3374^P 3.374^{P-3/8}
 2892^{P-1/2} 泥部 穴使部 皇セ 紀下 68² 21¹

3375^{P-3/4} 2183^P

三輪山に詣でた後、ただちに香椎宮に相当するところ、滋賀県米原あたりの淡海坂田宮へ白えはよいわけであらうか。かし、欽明天皇の御世にはすでに阿蘇山に見立てた神山が、三輪山の他に、もう一つ存在していたのであろう。と思われ。そこで、天照大神を奉戴せられて倭姫命は、そのもう一つの神山にも、礼をつくして詣でることになったのかも知れない。

阿蘇外輪山の切欠部に相当するところ、宇太乃阿貴宮、佐々波多宮あたりの狭隘の地を通り抜けた倭姫命の一行は、――やがて、伊賀盆地内の伊賀穴穂宮（三重県名賀郡青山町阿保）に到達した。

すでに述べたとおり、青山町阿保の小丘があり、この丘の上には、地震の神を祀る大村神社がある。（荒筋 第二編へ繰返）のさめる二朝の慣例。第四十八章へ望郷の

地88°1432
 "706°E
 "393°E

紀上326
 609^P

前頁6行に合わせ 480

62591^P上

復讐(ふくろう) 逆襲(ぎやくしゅう)
仕返(しがえ) 報復

3.374^p-3/8

項において既述
・なお、大村神社の本殿脇に「地震除災
の靈験あらたかという要石」が鎮祭されて
いる。(写真図版 604・605・606・607・608) 第 426・427
図参照)
・たぶん、伊賀盆地のほぼ中央に位置するこの小丘
は、「あまり目立たないが」阿蘇の中
岳に擬して考えらるゝいた
のであろう。

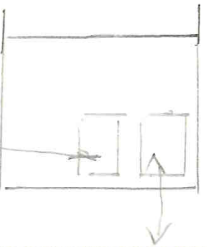
二方「
へ阿蘇神社の氏子たちは「明治維新ころま
で、鯨を捕ることも食べることも、絶対に
しなかった」
という。(「熊本の伝説」荒木精之「角川書
店」昭和五十三年一月三十日発行「一八八頁
参照」)
*元来「地下の大鯨の祟りを恐れて鯨を捕ったり食べ
たりしない習俗が生じたのであろうか」
とも思われるが「詳らかでない」

おすの図 祇園神社の参る里木

(黄色の丸の末に有る)

お原

- ・カラ-
- ・右頁、上
- ・右側に14217
- ・配置お。



- ・右側に大柱
- ・はみえされて
- ・下さm。



西参道口 一の鳥居・伊賀 阿保 大村神社

OMURA SHRINE IGA AO

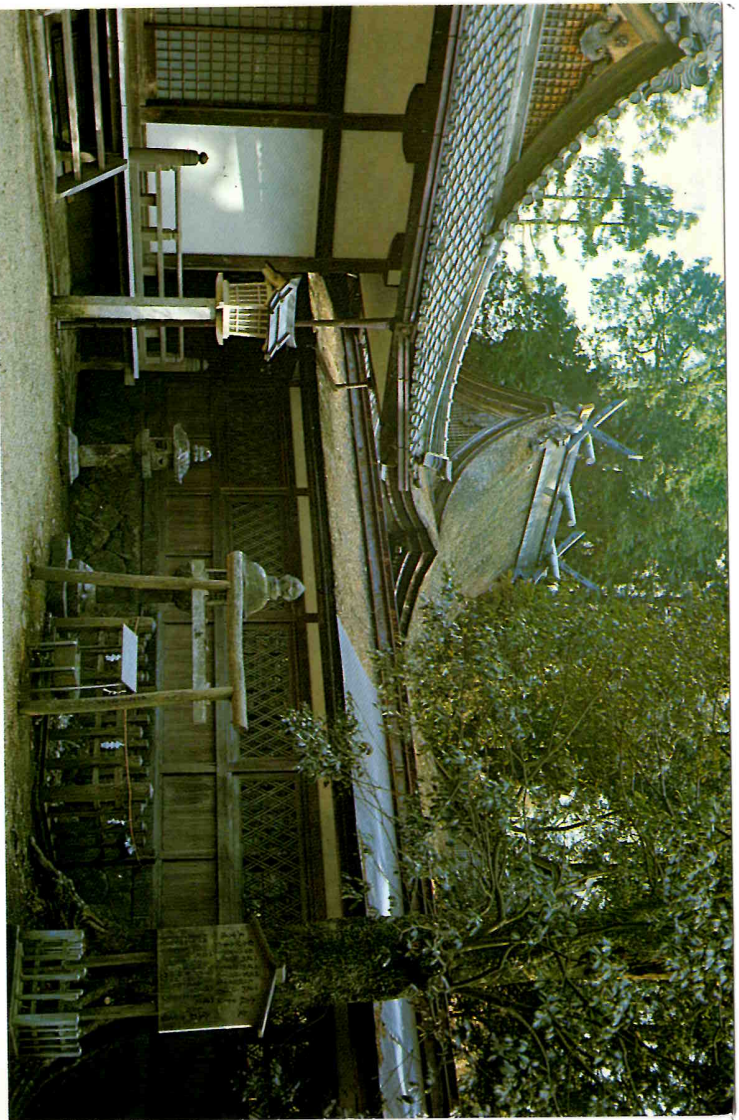
← H14

1409 写真図版 604 大村神社の西参道口・一の鳥居 (*第○区右側の鳥居)

3374P-6/8

482

3374^P-4/8



本殿と要石 地震守護の神石・伊賀 阿保 大村神社

OMURA SHRINE IGA AO

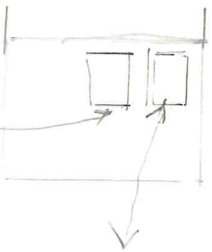
← H14

1209 写真図版 605 大村神社の本殿と要石 (地震守護の神石)

- ・神護景雲元年(767年)に、大村神社の要石が鎮祭された。
- ・千木と堅魚木が見える。
- ・由3299-5/8 阿保神社にも千木がみえる。

・カラー
・右頁の上

左側に
西を置くる。



左側に大水
はみ出さず
下さい。



境内手水舎 三の鳥居・伊賀 阿保 大村神社

OMURA SHRINE IGA AO

→ H1

(2) 1409
写真図版 606 大村神社 拝殿前の二の鳥居
(半字Pキ)

3,374 P - 5/8

483



要石・伊賀 阿保 大村神社

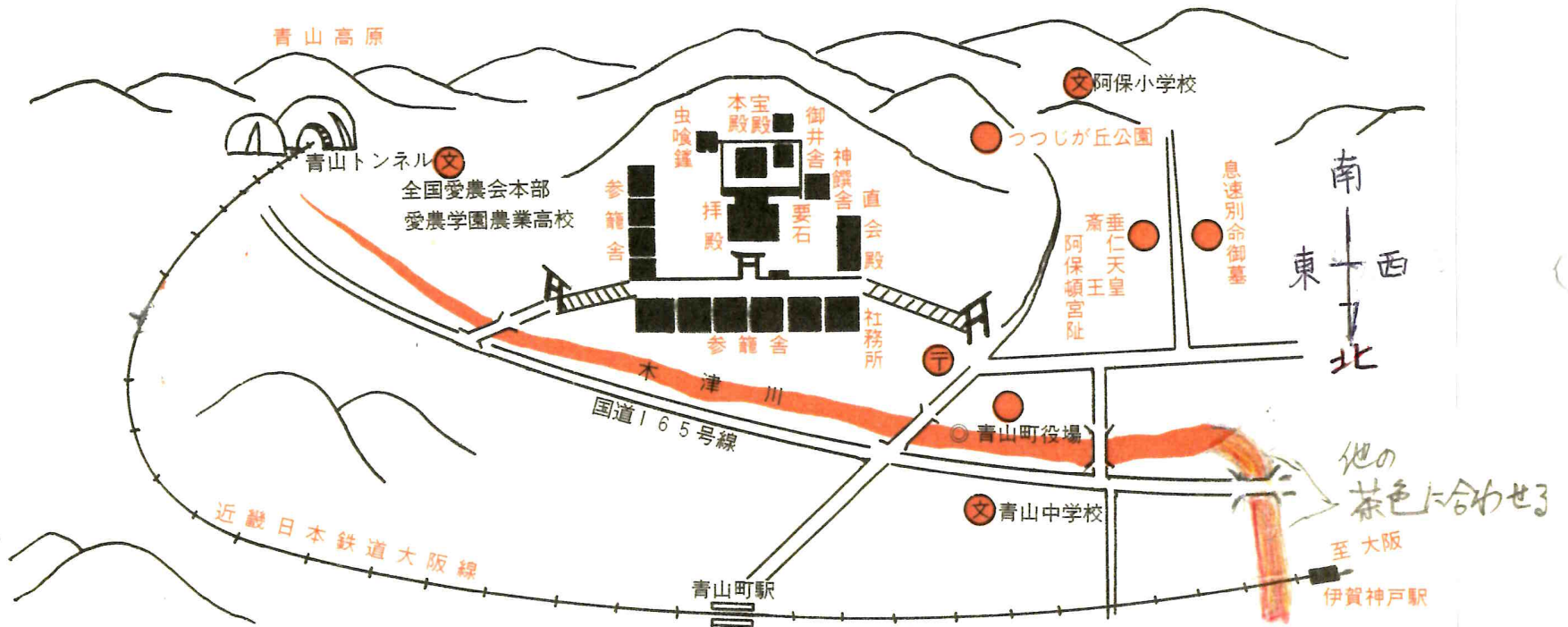
OMURA SHRINE IGA AO

← H1

1209
(カネカミ)
要石は、地震除災の聖蹟あらたかば、神石と呼ばれている。
1409
(カネカミ)
宇布図版 607 要石 (昭和52年10月、宗司が造営された)
(カネカミ)

3,374^P-6/8

- ・カラー
- ・きれいに
トレスして下さい。
- ・赤い字・川・●は
濃く、鮮明にしておいて
ほしい。
- 右頁の下、
左右に大きく
はみ出させて
掲載ください。



142G

第426図

あおやま あほ おほら
青山町阿保の『大村神社』近傍図

130G

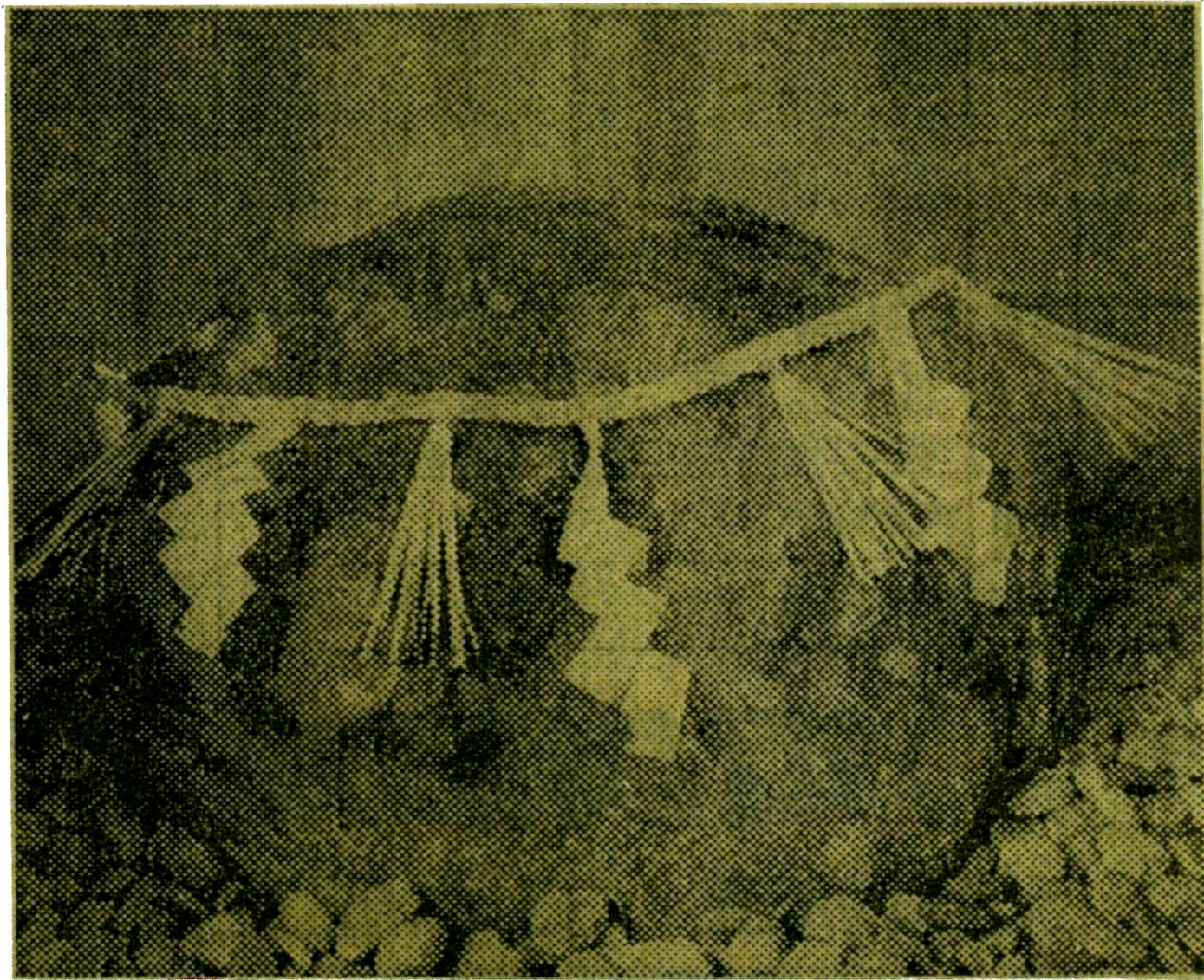
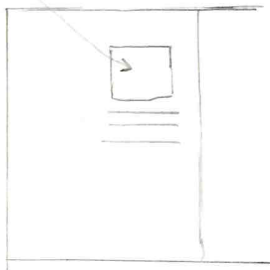
昭和56年1月10日に受け取った『大村神社』絵葉書、およびその封筒(田略図)参照。

頁の一番下に記載したい。

3,374^P-7/8

・上方の背景を、
もっと明るくしておいて
下さい。

・左頁上段の右側に
配置して下さい。

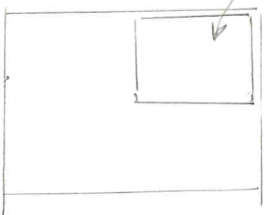


14Q9 ^{あおやま おほむら}写真図版 608 ^{かなめ川}三重県青山町大村神社の要石

13Q9 『朝日新聞』昭和56年7月4日付。〈^{あまの川}要石、^{はちまき}三重県青山町、^{かいせん}地震に靈驗あらたか〉参照。
12Q9 要石には、シメなわが、^か針巻のように掛けられていた。 485

21-の枠を11ル

・カラー
左角上段の
左側に、
はりかた大基
掲載下さい。



3,374^p-8/8



486

1404
第427図 地震を抑える要石

1304
『地図でめぐる神社とお寺』武光義 (たけみつよし) 帝国書院 平成24年7月12日発行 46頁参照
12. 鹿島回香取の両神宮にも「要石」がある。どちらか地上に隠れているのは、僅かおかし
9. 地下に隠れている部分は巨大で、地中深くに潜み地震をもたす大蛇を抑え込
ていいるという。

⑦ 3374⁰- $\frac{2}{8}$ 末2斤

コクヨ 白 20 20×20

礼をつくら
⑦ 337 $x^2 - \frac{7}{2}$

太いコチ

④ 加太越 (かっぱこえ) 参照

~~23373~~ $\frac{2}{8}$ 19
 23374 $\frac{2}{8}$ 69
 23377 $\frac{2}{5}$

コクヨ ケー20 20×20

④ 3337 $\frac{1}{2}$ 489 ⑤ 3337 $\frac{1}{2}$ 3
無類命書 51頁に 淡海の四言
とある

3.375-4/4

三ノ宮 914 新宮 914 新宮 914 新宮 914

3.375-4/4

1人 2108 神饌 科に依る酒食

TL

学大系、岩波書店、五九一頁補注六、九参照
 この宮は、地理的にいつて、彌奴国（山口）
 倉）に到った。（「日本書紀」上）日本古典文
 学大系、岩波書店、五九一頁補注六、九参照
 一行は、淡海坂田宮を後にした倭姫命の
 当する所、不破を通過して美濃国へ入り、
 美濃伊久良賀宮（岐阜県本巣郡巣南町居
 倉）に到った。（「日本書紀」上）日本古典文
 学大系、岩波書店、五九一頁補注六、九参照

功皇后の御行幸を心から歓迎し、そして香
 椎宮に比して考えられる「淡海坂田宮」へと
 御案内申し上げたのであろう。
 なお、坂田郡には、後世「坂田御厨」が置
 かれたという。（「日本書紀」上）日本古典文
 学大系、岩波書店、五九一頁補注六、九参
 照）
 「御厨」は、皇室の領地であり、神饌の
 料を献納した所である。（「広辞苑」へ御厨
 参照）

★

3,376-1/9

長良川の鵜飼 13頁 後姫命世紀 51頁
【簀棒】

天つき改訂 長良川の鵜飼 田 3,358頁 20斤

美濃伊久良賀宮から陸路で東へ行く
と「長良川」のほとりに出る。
・そんな時のことであつたろうか。
(イ) 美濃國造等から御船一隻を進呈した。
(ロ) また美濃縣主から御船二艘を進上した。
と「後姫命世紀」重仁天皇十年条参
照
「長良川の鵜飼」は有名であり、広く良
く知られてゐる。(写真図版 609・610・611・612・613 参照)
・鵜飼船に取り付けられた簀棒の先端で、
火びにかんえ下幾つもの鵜飼火が川面に映えて
美しう見えた。
・十羽以上もの鵜達を、鵜匠が実に手際よく
巧みに操る。
・それは、見る人にと興奮と感動を与え、
おかなかつた。

3,376² - 2/9

という記録がある

・カウー

・右頁上半分に、左右を限度一杯はみ出させて掲載下さい。

・目暗くならないようにして下さい。(出来るだけ明るくお願ひします)

いちばん古い文書は、^{300年}文武天皇大和2年(702)11月御野国各牟郡中里の戸籍に「^{うがいに}酒人部^{あさからめ}竟比の妻^{うがいに}鵜飼部^{あさからめ}目都良女」とある記録だといふ(「鵜飼」)



1409 写真図版 609 篝火に映える長良川の鵜飼

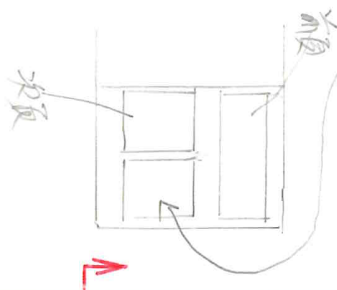
1309

『世界大百科事典』7、平凡社、1972年4月25日発行、267頁、^{ぎふ}岐阜参照

1209

千年以上の伝統をもち、^{ぎふ}岐阜市の夏の夜をいろどる風物詩である。
長良川、^{ぎふ}角川写真文庫40、昭和31年ころ発行、66頁参照) 492

、カ-
 右頁、右下(1/4頁)に
 はみ出させて掲載下さい。



3,376P- 3/9



→ 1/4

493

1306

1406

写真図版610 長良川の鵜匠と鵜

157P 564P

う (153)

う

『長良川の鵜飼』長良川の鵜飼研究会、岐阜新聞社、1994年5月9日発行、10頁参照

- ・カウー
- ・右頭、左下(1/4復)に、はみ出させて掲載下さい。

3.376^P - 4/9

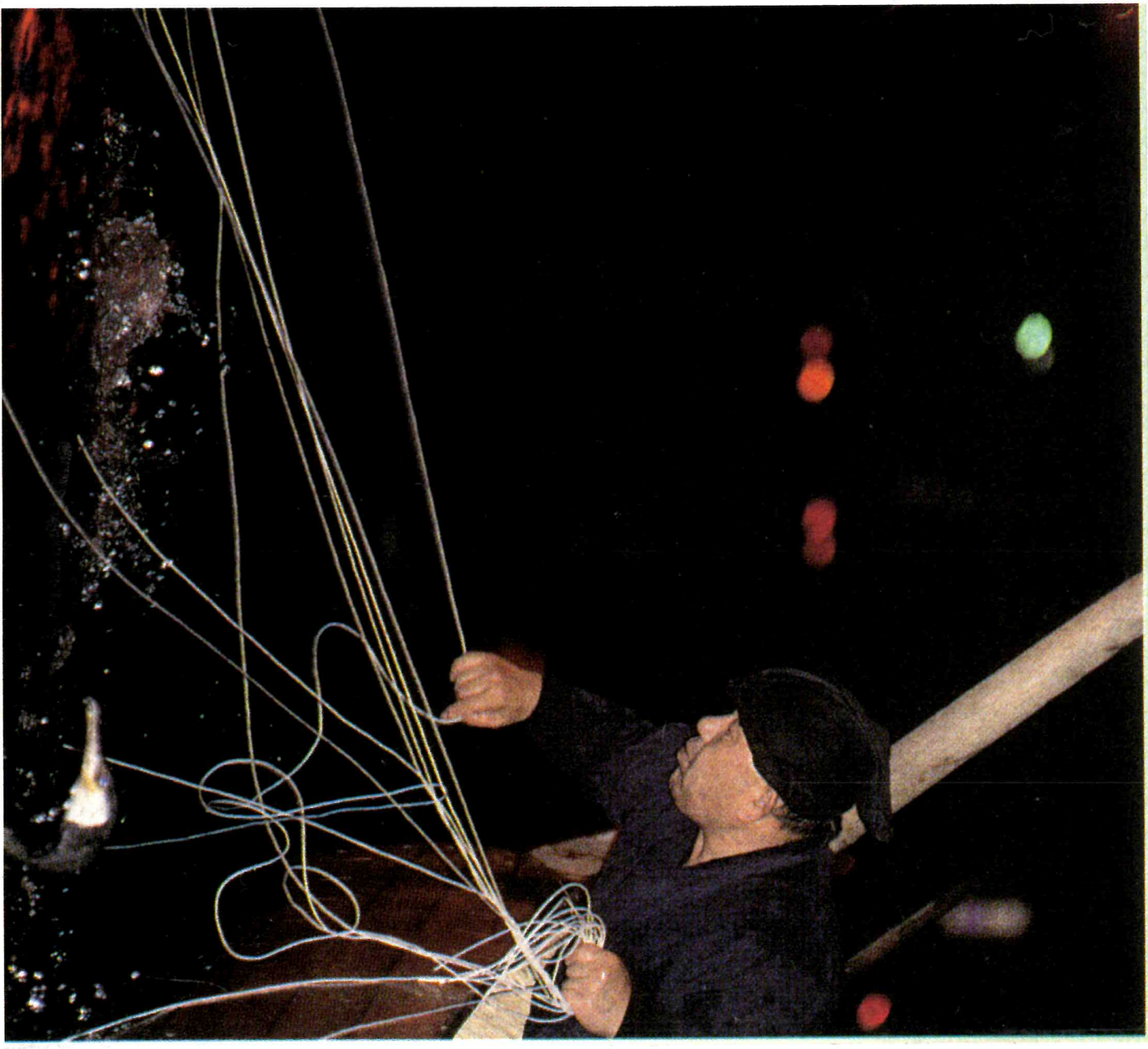
1309

1429

9
写真版 611 鶏匠の手さは“き”

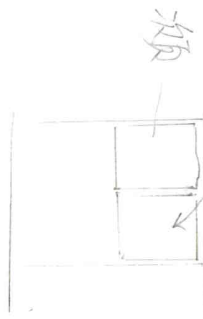
『ぎぶ長良川の鵜飼』長良川の鵜飼研究会、岐阜新聞社、1994年5月9日発行、10頁、17頁参照。
 1209 たたき たたき とう
 ・左手で12本の千縄の束を握り、右手で12羽の鵜に取り付けた本体を巧妙にさばる。

「輪筒」の寸法 86^φ 5行 太^大 太^大



494

・カウ
・左頭右上に、
はみ虫させて掲載下さい。



495^P

3,376^P - 5/9



495

1304

1404

写真出版 612 魚を捕えて浮上した鵜

『ぎんぎん』の鵜飼、長良川の鵜飼研究会、岐阜新聞社、1994年5月9日発行、18頁参照。
1204 とろ
・魚を捕えた鵜は、水面へ浮かび、魚の頭が下となるようにしゃべっており、飲み込む
という。(TV)

・カラ-
・左身左上、
はみ出し掲載下2m。

496^p

3.376^p - 6/9



1404
写真図版 613 捕えた魚を吐き出す鵜

1304

『ぎぶ長良川の鵜飼』長良川の鵜飼研究会、岐阜新聞社、1994年5月9日発行、20頁参照。
 1304 鵜 4.5匹を各人で水に落さなうた鵜を見つけた鵜匠は、直ちに鵜を船の上へ引き上げ、
 左手は朱縄を握、たまき嘴を開き、右手で喉の部分に魚を押し上げ、足もとにある籠へ、
 吐き出させる。〔鵜飼〕長良川、角川写真文庫40、昭和34年ころ発行、46頁参照。

- ・カラー
- ・右頁上半分に、限度一杯はみ出させて掲載下さい。

3,376^P - 7/9

→ カット



- ・中央縦方向の帯を、目立たなくしておいて下さい。
- ・暗くならないようにして下さい。明るくお願いします。

いまわたり
今渡
地名辞
169頁

1329.

1429 写真図版 614 木曾川 ^{きそがわ}

→

『世界大百科事典』 平凡社 1972年4月25日発行 267頁 「山支皇」参照
 ・木曾川 ^{きそがわ} の侵食でできた峡谷美は ^{きょうみ} 志賀重昂 ^{しかしげあき} により「日本ライン」と名付けられた。今渡 ^{いまわたり} から犬山橋 ^{いぬやまはし} までのライン下りが特に名高い。

497^P

3,376^P-8/9

・カラー
・右頁下半分に、
はまなこ掲載
下さい。



裏付が無い。

1304

1404

写真版 615

木曾川 (ライン下り)

『日本の湖沼と渓谷』9 東海 浜名湖と恵那峡・日本ライン 井上靖監修 昭和60年に発行 98頁参照

大カニ 支 1004P
 4エノク 支 411.7.18
 小林 190P
 小林 34P
 小林 619P
 皇太神宮儀式帳 2P
 2014P
 神宮(カニ) 紀上 222P
 3377-1/5
 新町 神宮 619P

紀上 591P
 前 195P
 倭姫命世紀 51P
 船数 51P
 地図 14P
 版 14P
 (皇太神宮儀式帳 2P 船の記載なし)

県西部の豊前宮に擬して考えらるようか。
 なお、岐阜県本巣郡巣南所居倉は、揖斐川
 沿いの地であり、
 桑名の海に入る。(五万分一地図。帝国地名
 辞典に太田為三郎、名著出版「揖斐川」参照
 この時、御船数隻が進呈された。(「倭姫
 命世紀」垂仁十年八月一日系参照)
 あるいは、倭姫命および五大夫等は、日美
 野代宮に人とお遷りになった。
 山に神宮(鈴鹿小山宮)をお造りになつて
 天照大神を奉斎されたのであろう。
 皇太神宮儀式帳は、やや簡潔に、
 「次伊勢桑名野代宮坐只。其宮坐時爾。伊
 勢国造遠祖、建表方平。汝國名向問賜。曰。ス
 神風伊勢國止。白。支。即神御田并神戸進支。次

神宮大 19
 25P

大カニ
 132P

紀上203^p

他姫世記 51^p

3,377^p-2/5

何くさうい

文 1006^p

別子3332-支(支の誤りか)

4エ710K H11.7.18

に小林

于 43^p 於 乎 同 用 いる。

後姫命世記 51^p 下左

4エ710K H11.7.18

皇太子御成婚之下

紀下388^p 末

大庵「イ」(異本のミ)

(異本) 1058

河曲次鈴鹿小山宮生。彼時、川俣縣造等遠祖、大比古、其即神御田并神戸進。云々

と述べている。一方、倭姫命世記は、より詳しく、鈴鹿奈具波志忍山、神宮造奉天、六箇年奉斎。于時國造大若子命(一名大幡主命)、参相、御共仕奉。國內風俗令白。又國造建日方命参相。汝國名何問給。答白。神風伊勢國

止、追舍人弟伊爾方命。又地口御田。桑名神戶。又大若子命進舍人弟乙若子命。次川俣縣造祖大比古命参相。汝國名何問賜。答白。味酒鈴鹿國奈其(具)波志忍山止。然神宮造奉令幸行。又神田並神戸進。云々

と記述している。

なお、神武即位前紀戊午年十月条に、大室を忍坂邑に作りて、云々。とあり、道臣命(大伴代の遠祖)が歌った歌

③ 3362- $\frac{1}{2}$
ニ

3.377- $\frac{3}{5}$

お土か
忍坂 紀上 209°
④ 3377- $\frac{3}{5}$ 199
12/19

H4.11.3 (火) 天照日
H8.9.17 (土)

な お

① 皇太神宮儀式帳に、

鈴鹿小山宮坐

非常に興味深いことがある。

② 倭姫命世記には、

鈴鹿奈具我志忍山神宮造奉天

とあり、北伊勢の小山(お山)に神宮をお

造りになつたように解される。

宇佐の大元山の山頂に、天照大神と三女

神の社口内宮が造られたことにならう

地理的にみて宇佐に相当する北伊勢

の山(お山)に天照大神の社口外宮(離宮)が

造られたのであろう

と思われ

*

収 3332-2/3

3377-2/3

3377-4/5

3377-2/3

不事典 24P

土カン 1050P

以上 204P 注1

謡に、
「於佐簡廼 於朋務露夜珥 云々」
とある。
「忍坂の 大室屋に 云々」
とある。
つまり、「忍」を「於」と表記しているこ
とが分る。「日本書紀」(上) 日本古典文学大
系、岩波書店、二〇四頁注一「忍坂」参照。
また、万葉仮名としての「忍」は「お」で
あるが、「忍」を「於」とも訓む。「万葉集
事典」佐佐木信綱、平凡社「萬葉仮名一覧」
皇太神宮儀に記されている「鈴鹿小山宮」は「
「大字典」上田万年、講談社「於」参照。
「於」で「明瞭でないが」
へ倭姫命世記に記されている「鈴鹿奈具波
志忍山に造られた神宮」は「皇太神宮
儀式帳に記されている「鈴鹿小山宮」のこと
であろう。
と「想像されるが、定かでない。
また、繰り返して述べるが、三重県桑名郡多
度村大字多度の「多度神社」(祭神多度神
一に天津彦根命なりと云ふ)は、

「同防難と相似形の」昔の伊勢湾の形は すがうなだ 1181°
やめ！ 合さない。 (すはう)

3.377-5/5

3332^{P-3/5} 版

「俗に、北伊勢大神宮と呼ばれている」という。へ「日本社寺大観」名著刊行会へ多度神社参照。第六十五章へ周行天下の項において既述）
・なるほど、倭姫命がお造りになった日神宮が、日多度神社になのかどうか分らないとである。

■「かしともあれ、へ倭姫命は、方角的にいつて、宇佐に相当する北伊勢に、外宮（離宮）をお造りに

なり、天照大神をお祭りされたのであろう」と推察される。

①宇佐は、肥後国の皮石郡（合志郡）から見て東北の方向にあり、周防灘に面している。

②北伊勢も、大和国の都から見て東北の方向にあり、伊勢湾に面している。

という類似点がある。

「あつと、この当時の伊勢湾は、あつと北の方向にまでも入り込んでいたであろう」と想像される。

＊

H30(2018)8.31(金)~9.2(4回)
 令和元(2019)8.23(金)~8.23(3回)
 令和3(2021)1.2(土)~1.7(4回)

3,378^P-1/3

→ S62.8.3 田中 徳(録) 大カコ 150 大カコ 1615
 紀下 392 持統天皇 加とと きて おられた

1/15
 1/3

*

六二一頁へ桑名^{くわな} 日本社寺大観^{にっぽんしゃじだいくわん} 名著刊
 行会、四一六頁へ桑名^{くわな}神社・中臣神社^{なかとみ} 参照

また、この当時(欽明朝^{きんめいちょう})以降、
 へ中臣氏の傍系(鎌足の先祖^{かまたりのせんぞ})は、宇佐に
 相当する桑名^{くわな}一帯^{いつたい}においても、大きな力^{ちから}を持
 つようになつていつたのであろう
 と想像される。
 桑名^{くわな}中臣神社は俗に春日社^{かすがい}といひ、往時^{おうじ}
 は神宮寺佛眼院^{ぶつがん}を置き、田禄^{でんろく}五十石^{ごじゅうしやく}を給^{きゅう}せら
 れたという。桑名^{くわな}の町の鎮守^{ちんしゅ}とされ、其の祭^{さい}
 禮^{れい}は極めて盛^{さか}んで、石採祭^{いしさい}という神事^{しんじ}がある。
 (一) 帝国地名辞典^{ていこくちめいじ}に太田^{おおの}為三郎^{みさぶろう}、名著出版、